



[Software for the Open Enterprise™](#)

## 製品リリースノート

### 製品

Sentinel™ 5.1.3.0 サービスパック 1 (2006/12/08)リリース

### 目次

製品リリースノート.....	1
製品.....	1
目次.....	1
説明.....	1
新機能.....	2
インストール.....	2
サービスパックをインストールする.....	2
Sentinel コントロールセンターおよび Sentinel データマネージャでの言語の選択 ...	6
言語と国コード.....	9
バグフィックス.....	9
Sentinel.....	9
ウィザード.....	10
データベース.....	11
マニュアル.....	11
既知の問題.....	12
Novell テクニカルサポート.....	13

### 説明

本リリースノートは Sentinel™ 5.1.3.0 with iTRAC™ のサービスパック 1 (2006/12/08)リリースを対象としています。本サービスパックは既存の Sentinel™ 5.1.3.0 インストールに対してインストールします。詳細については[インストール](#)手順を参照してください。

本サービスパックには他言語のサポートおよび Sentinel™ 5.1.3.0 のソフトウェアコンポーネントのフィックスが含まれます。

このサービスパックは Sentinel™ 5.1.3.0 のソフトウェアコンポーネントがインストールされている各コンピュータにインストールする必要があります。

Sentinel™ 5.1.3.0 サービスパック 1 (2006/12/08)は Sentinel™ 5.1.3.0 以前にリリースされたホットフィックスをまとめた総合サービスパックです。

## 新機能

- このリリースには、Sentinel コントロールコンソールと Sentinel データマネージャに対する簡体中国語、繁体中国語、および日本語のサポートが追加されています。

## インストール

---

注意: このサービスパックは Sentinel™ 5.1.3.0 のソフトウェアコンポーネントがインストールされている各コンピュータにインストールする必要があります。これはサーバ(Sentinel サーバ、関連エンジン、Sentinel データベース、エージェントマネージャなど)ソフトウェアおよびクライアント(Sentinel コントロールセンター、エージェントビルダ、Sentinel データベースマネージャなど)ソフトウェアの両方に該当します。

---

本リリースはサービスパックであるため、既存のインストール以外にはインストールできません。このサービスパックをインストールすることで、既存のインストールに最新のソフトウェアフィックスが適用されます。

このサービスパックは総合サービスパックであり、これまでに Sentinel™ 5.1.3.0 用にリリースされたすべてのホットフィックスが含まれています。そのため、このサービスパックをインストールするにあたり、これまでにリリースされたホットフィックスを別途インストールする必要はありません。このサービスパックはこれまでにリリースされたいずれかの Sentinel™ 5.1.3.0 ホットフィックスがインストールされている場合でも、その上にインストールできます。

この文書で解説している手順は、本サービスパックのインストール専用です。Sentinel™ 5.1.3.0 をまだインストールしていない場合は、Sentinel™ 5.1.3.0 の新規インスタンスのインストール方法、あるいは Sentinel™ 5.1.3.0 へのパッチ方法について『Sentinel インストールガイド』を参照してください。

このサービスパックは既存の Sentinel™ 5.1.3.0 インストールにのみ実行してください。

Sentinel™ 5.1.3.0 をまだインストールしていない場合は、Sentinel™ 5.1.3.0 インストーラを使用してインストールしてください。その後、サービスパックのインストーラを実行して、最新のフィックスと拡張機能を適用します。手順については『Sentinel インストールガイド』を参照してください。

古いバージョンの Sentinel™ がインストールされている場合は、Sentinel™ 5.1.3.0 のパッチインストーラを使用し、現在のインストールにパッチを適用して Sentinel™ 5.1.3.0 に移行する必要があります。その後、本サービスパックのインストーラを実行し、最新のフィックスと拡張を適用してください。手順については『Sentinel インストールガイド』を参照してください。

本サービスパックには自動インストーラが付属し、置き換える対象となる既存のソフトウェアコンポーネントをバックアップし、フィックスをインストールします。バックアップファイルは ESEC\_HOME ディレクトリの下にある「SP<id>\_<date>\_bak」という名前のディレクトリに格納されます。ここで<id>はサービスパックの識別番号を、<date>はサービスパックの日付をそれぞれ意味します。たとえば、「SP1\_2006-12-20-GMT\_bak」と表示されます。

### サービスパックをインストールする

---

注意: サービスパックをインストールする前に、マシン全体のバックアップを行うことを強くお勧めします。コンピュータ全体のバックアップが不可能な場合は、最低でも ESEC\_HOME ディレクトリの内容をバックアップしてください。インストール中の突発的なエラーからシステムを保護するのに役立ちます。

---

サービスパックのフィックスをソフトウェアおよびデータベースにインストールするには、次の手順に従います。

1. Windows の場合は Administrator で、UNIX の場合は root でログインします。
2. サービスパックが含まれる ZIP ファイルを解凍します。
3. 次に示す各コンポーネントを含む実行中のすべての Sentinel アプリケーションをシャットダウンします。
  - Sentinel コントロールセンター
  - Sentinel コレクタビルダ
  - Sentinel データマネージャ
4. 次に示す各サービスを含む実行中のすべての Sentinel サービスをシャットダウンします。
  - Sentinel コレクタマネージャ

Windows:

サービスマネージャを使用して、「Sentinel Collector Manager」サービスを停止します。

UNIX:

esecadm ユーザで次を実行します。

```
$ESEC_HOME/wizard/agent-manager.sh stop
```

- Sentinel サーバ

Windows:

サービスマネージャを使用して、「Sentinel」と「Sentinel Communication」サービスを停止します。

UNIX:

```
$ESEC_HOME/sentinel/scripts/sentinel.sh stop
```

5. コマンドラインで、先に解凍したサービスパックのトップレベルに移動します。
6. サービスパックのインストーラを開始するには、service\_pack スクリプトを実行します。

Windows:

```
.\%service_pack.bat
```

UNIX:

```
./service_pack.bat
```

7. 確認のメッセージが表示されるので<Enter>キーを押し、サービスパックのインストール手順を開始します。

オペレーティングシステムのデフォルト言語以外の言語で Sentinel コントロールセンターまたは Sentinel データマネージャを使用する場合は、「[Sentinel コントロールセンターおよび Sentinel データマネージャでの言語の選択](#)」のセクションで説明されている手順に従います。
8. Sentinel のソフトウェアがインストールされているすべてのコンピュータで前述の手順を繰り返します。Sentinel のサーバソフトウェア、クライアントソフトウェアなど、任意の Sentinel ソフトウェアがインストールされているすべてのマシン上で実行する必要があります。

9. Sentinel データベースがインストールされているコンピュータでは、次の手順に従って Sentinel データベースにパッチを適用します。

Oracle を使用した Sentinel データベースの場合:

1. すべての Sentinel サーバプロセスと Sentinel データベースマネージャ プロセスが停止していることを確認します。
2. まだログインしていない場合は、データベースコンピュータで、「root」ユーザとしてログインします。
3. 現在の環境変数をチェックして、java(バージョン 1.4.2)が PATH 上にあることを確認します。これは、コマンドラインで次のコマンドを実行することにより行うことができます。

```
java -version
```

上のコマンドが正しく実行されない場合は、システム上の java がインストールされている場所を見つけるか、java をダウンロードしてインストールします。その後、PATH 環境変数を更新して java 実行可能ファイルを加えます。たとえば、java が次のディレクトリにインストールされているとします。

```
/opt/Sentinel5.1.3.0/Sun-1.4.2
```

この場合、PATH 環境変数の最後に次の文字列を追加します。

```
:/opt/Sentinel5.1.3.0/Sun-1.4.2/bin
```

4. サービスパックの ZIP ファイルを解凍します(このコンピュータ上でまだ解凍していない場合)。
5. サービスパックを解凍したディレクトリの下にある次のディレクトリに移動します。

```
db_patch/bin
```

6. 次のコマンドを入力します。

```
./PatchDb.sh
```

7. パッチをインストールする Oracle の Sentinel データベースのホスト名または静的 IP アドレスを入力します。
8. パッチをインストールする Oracle の Sentinel データベースのポート番号を入力します。
9. Oracle ソフトウェアの所有者ユーザ名を入力します。たとえば、「oracle」と入力します。
10. パッチをインストールする Oracle の Sentinel データベースのデータベース名を入力します。
11. 「esecdba」のユーザ名とパスワードを入力します。スクリプトにより、入力情報の確認が行われ、データベースのパッチがインストールされます。
12. スクリプトによるパッチの適用が終了したら、エラーがないかを確認します。エラーがなければ Sentinel データベースへのパッチの適用は完了です。エラーがあった場合はエラーを解決し、PatchDb ユーティリティを再実行します。

MS SQL を使用した Sentinel データベース(Windows 認証ログインで「esecdba」としてログインする)の場合:

13. すべての Sentinel サーバプロセスと Sentinel データベースマネージャプロセスが停止していることを確認します。
14. まだログインしていない場合は、データベースコンピュータで、「esecdba」Windows ドメインユーザとしてログインします。
15. 現在の環境変数をチェックして、java(バージョン 1.4.2)が PATH 上にあることを確認します。これは、コマンドラインで次のコマンドを実行することにより行うことができます。

```
java -version
```

上のコマンドが正しく実行されない場合は、システム上の java がインストールされている場所を見つけるか、java をダウンロードしてインストールします。その後、PATH 環境変数を更新して java 実行可能ファイルを加えます。たとえば、java が次のディレクトリにインストールされているとします。

```
C:¥Program Files¥esecurity5.1.3.0¥Sun-1.4.2
```

この場合、PATH 環境変数の最後に次の文字列を追加します。

```
;C:¥Program Files¥esecurity5.1.3.0¥Sun-1.4.2¥bin
```

16. サービスパックの ZIP ファイルを解凍します(このコンピュータ上でまだ解凍していない場合)。
17. コマンドプロンプトを開きます。
18. サービスパックを解凍したディレクトリの下にある次のディレクトリに移動します。

```
db_patch¥bin
```

19. 次のコマンドを入力します。

```
.¥PatchDb.bat
```

20. パッチをインストールする Sentinel データベースの SQL Server のホスト名または静的 IP アドレスを入力します。
21. パッチをインストールする SQL Server Sentinel データベースの名前を入力します。
22. Windows 認証のオプション 1 を入力します。スクリプトにより、入力情報の確認が行われ、データベースのパッチがインストールされます。
23. スクリプトによるパッチの適用が終了したら、エラーがないかを確認します。エラーがなければ Sentinel データベースへのパッチの適用は完了です。エラーがあった場合はエラーを解決し、PatchDb ユーティリティを再実行します。

MS SQL を使用した Sentinel データベース(SQL 認証ログインで「esecdba」としてログインする)の場合:

24. すべての Sentinel サーバプロセスと Sentinel データベースマネージャプロセスが停止していることを確認します。
25. まだログインしていない場合は、データベースコンピュータにログインします。

- 現在の環境変数をチェックして、java(バージョン 1.4.2)が PATH 上にあることを確認します。これは、コマンドラインで次のコマンドを実行することにより行うことができます。

```
java -version
```

上のコマンドが正しく実行されない場合は、システム上の java がインストールされている場所を見つけるか、java をダウンロードしてインストールします。その後、PATH 環境変数を更新して java 実行可能ファイルを加えます。たとえば、java が次のディレクトリにインストールされているとします。

```
C:¥Program Files¥esecurity5.1.3.0¥Sun-1.4.2
```

この場合、PATH 環境変数の最後に次の文字列を追加します。

```
;C:¥Program Files¥esecurity5.1.3.0¥Sun-1.4.2¥bin
```

- サービスパックの ZIP ファイルを解凍します(このコンピュータ上でまだ解凍していない場合)。
- コマンドプロンプトを開きます。
- サービスパックを解凍したディレクトリの下にある次のディレクトリに移動します。

```
db_patch¥bin
```

- 次のコマンドを入力します。

```
.¥PatchDb.bat
```

- パッチをインストールする Sentinel データベースの SQL Server のホスト名または静的 IP アドレスを入力します。
- パッチをインストールする SQL Server Sentinel データベースの名前を入力します。
- SQL 認証のオプション 2 を入力します。
- 「esecdba」のユーザ名とパスワードを入力します。スクリプトにより、入力情報の確認が行われ、データベースのパッチがインストールされます。
- スクリプトによるパッチの適用が終了したら、エラーがないかを確認します。エラーがなければ Sentinel データベースへのパッチの適用は完了です。エラーがあった場合はエラーを解決し、PatchDb ユーティリティを再実行します。

## Sentinel コントロールセンターおよび Sentinel データマネージャでの言語の選択

- 次のファイルのバックアップコピーを作成します。

Windows:

```
%ESEC_HOME%¥sentinel¥console¥run.bat
```

```
%ESEC_HOME%¥sdm¥sdm.bat
```

UNIX:

```
$(ESEC_HOME)/sentinel/console/run.sh
```

```
§ESEC_HOME/sdm/sdm
```

2. テキストエディタで次のファイルを開きます。

Windows:

```
%ESEC_HOME%¥sentinel¥console¥run.bat
```

UNIX:

```
§ESEC_HOME/sentinel/console/run.sh
```

3. ユーザの言語と国のプロパティを編集します。

Windows:

次に示す最初の行から「REM」を削除してアンコメント化し、  
##INSTALL.LOCAL##を次の言語と国コードに表示されている言語コードで置き換えます。言語コードは小文字で指定します。国コードがある場合は、次に示す 2 行目から「REM」を削除してアンコメント化し、##INSTALL.COUNTRY##を次の言語と国コードに表示されている国コードで置き換えます。国コードは大文字で指定します。

たとえば、言語が簡体中国語の場合は、次のように変更します。変更前:

```
REM set SENTINEL_LANG_PROP=-  
Duser.language=##INSTALL.LOCALE##  
REM set SENTINEL_CTRY_PROP=-  
Duser.country=##INSTALL.COUNTRY##
```

変更後:

```
set SENTINEL_LANG_PROP=-Duser.language=zh  
set SENTINEL_CTRY_PROP=-Duser.country=CN
```

UNIX:

次に示す最初の行の始めにある「#」を削除してコメント化を解除し、  
###INSTALL.LOCAL##を次の言語と国コードに表示されている言語コードで置き換えます。言語コードは小文字で指定します。国コードがある場合は、次に示す 2 行目の行の始めにある「#」を削除してコメント化を解除し、  
##INSTALL.COUNTRY##を次の言語と国コードに表示されている国コードで置き換えます。国コードは大文字で指定します。

たとえば、言語が簡体中国語の場合は、次のように変更します。変更前:

```
#SENTINEL_LANG_PROP=-Duser.language=##INSTALL.LOCALE##  
#SENTINEL_CTRY_PROP=-Duser.country=##INSTALL.COUNTRY##
```

変更後:

```
SENTINEL_LANG_PROP=-Duser.language=zh  
SENTINEL_CTRY_PROP=-Duser.country=CN
```

4. ファイルを ANSI のエンコード形式で保存します。
5. テキストエディタで次のファイルを開きます。

Windows:

```
%ESEC_HOME%¥sdm¥sdm.bat
```

UNIX:

```
$ESEC_HOME/sdm/sdm
```

6. ユーザの言語と国のプロパティを編集します。

Windows:

次に示す最初の行から「REM」を削除してコメント化を解除し、  
##INSTALL.LOCAL##を次の[言語と国コード](#)に表示されている言語コードで置き換えます。言語コードは小文字で指定します。国コードがある場合は、次に示す 2 行目から「REM」を削除してコメント化を解除し、##INSTALL.COUNTRY##を次の[言語と国コード](#)に表示されている国コードで置き換えます。国コードは大文字で指定します。

たとえば、言語が簡体中国語の場合は、次のように変更します。変更前:

```
REM set SENTINEL_LANG_PROP=-  
Duser.language=##INSTALL.LOCALE##  
  
REM set SENTINEL_CTRY_PROP=-  
Duser.country=##INSTALL.COUNTRY##
```

変更後:

```
set SENTINEL_LANG_PROP=-Duser.language=zh  
set SENTINEL_CTRY_PROP=-Duser.country=CN
```

UNIX:

次に示す最初の行の始めにある「#」を削除してコメント化を解除し、  
##INSTALL.LOCAL##を次の[言語と国コード](#)に表示されている言語コードで置き換えます。言語コードは小文字で指定します。国コードがある場合は、次に示す 2 行目の行の始めにある「#」を削除してコメント化を解除し、  
##INSTALL.COUNTRY##を次の[言語と国コード](#)に表示されている国コードで置き換えます。国コードは大文字で指定します。

たとえば、言語が簡体中国語の場合は、次のように変更します。変更前:

```
#SENTINEL_LANG_PROP=-Duser.language=##INSTALL.LOCALE##  
#SENTINEL_CTRY_PROP=-Duser.country=##INSTALL.COUNTRY##
```

変更後:

```
SENTINEL_LANG_PROP=-Duser.language=zh  
SENTINEL_CTRY_PROP=-Duser.country=CN
```

7. ファイルを ANSI のエンコード形式で保存します。

8. Windows:

- a. ディレクトリ%ESEC\_HOME%\%sentinel%\console に空のファイルを作成し、console.ja という名前を付けます。
- b. console.ja ファイルをテキストエディタで開き、次の行を追加します。  
-Duser.language=<language\_code> -Duser.country=<country\_code>  
「language\_code (言語コード)」と「country\_code (国コード)」は[言語と国コード](#)を参照して指定します。
- c. ファイルを ANSI のエンコード形式で保存します。
- d. ディレクトリ%ESEC\_HOME%\%sdm% に空のファイルを作成し、sdm\_gui.ja という名前を付けます。
- e. sdm\_gui.ja ファイルをテキストエディタで開き、次の行を追加します。  
-Duser.language=<language\_code> -Duser.country=<country\_code>

「language\_code (言語コード)」と「country\_code (国コード)」は[言語と国コード](#)を参照して指定します。

f. ファイルを ANSI のエンコード形式で保存します。

### 言語と国コード

言語	言語コード	国コード
英語	en	
スペイン語	es	
フランス語	fr	
ドイツ語	de	
イタリア語	it	
ポルトガル語	pt	
簡体中国語	zh	CN
繁体中国語	zh	TW
日本語	ja	

## バグフィックス

### Sentinel

#### SEN-4262

**問題点:** 総計サービスが Oracle データベース上で「maximum cursor exceed (最大カーソル数を超過しました)」の原因になります。

**フィックス:** この問題を修復するため例外処理が改善されました。

#### SEN-4411

**問題点:** 総計サービスがイベントファイルの処理を停止します。

**フィックス:** 修正されました。

#### SEN-4446

**問題点:** イベントファイルのキャッシュからイベントを再挿入すると、DAS バイナリで固有の制限エラーが発生します。

**フィックス:** この問題を修復するため JDBCLoadStrategy でのエラー処理が改善されました。

#### SEN-4449

**問題点:** OCI イベントの挿入戦略が DB 挿入エラーを正しく処理できないことが原因で、イベントの再挿入ロジックが失敗します。

**フィックス:** この問題を修復するため例外処理が改善されました。

### SEN-4451 (拡張)

問題点: JDBCLoadStrategy で PreparedStatement (および純粋な SQL)ではなく CallableStatement (およびストアドプロシージャ)が使用されるため、JDBCLoadStrategy の動作が遅くなります。

フィックス: PreparedStatement を使用し、テーブルへの挿入を直接行うようにして、JDBCLoadStrategy のパフォーマンスを改善しました。

### SEN-4452

問題点: EventTime を使用してフィルタを作成すると、RuleLG エラーが発生します。

フィックス: この問題を修正するため、データ型を更新しました。

### SEN-4465

問題点: 日付/時刻フィールド(CV11 など)で比較を行うフィルタを作成しても、java プロセスで時間が正しく比較されません。

フィックス: 修正されました。

### SEN-4469

問題点: ヘッドレス環境では SDM コマンドラインを実行できません。

フィックス: SDM コマンドラインから AWT に対する依存関係を除きました。

### SEN-4627

問題点: 関連の電子メールは %tag% を含む名前では機能しません。%all% の場合のみ機能します。

フィックス: 修正されました。

## ウィザード

### WIZ-1728

問題点: syslog サーバが接続クライアント全体にイベントを送信しようとするとう失敗します。送信対象のクライアントが 1 台のときだけ、正常に送信できます。

フィックス: アクティブな 1 台のクライアントだけでなく、アクティブなクライアントのすべてにイベントを送信できるよう、syslog が更新されました。

### WIZ-1738

問題点: syslog サーバでは不必要なメッセージをキューから削除できません。また、syslog のサーバ側でメッセージを受信する回数が、syslog のクライアント側で処理できる回数(イベント/秒単位)を上回る場合、メッセージが失われます。

フィックス: すべてのアクティブなクライアントで不必要とされたメッセージは削除されます。syslog サーバはクライアントキューでメッセージを受信できるだけの十分なスペースが確保できるまで、待機します。

### WIZ-1743

問題点: syslog は UDP 接続のバッファへのイベント送信を停止します。

フィックス: UDP データの処理はこれまで syslog サーバのバッファがいっぱいになった時点で停止されました。しかし、バッファに空きスペースができて、処理が再開されませんでした。この問題は修正されました。

## データベース

### DAT-198

問題点: OCI のイベント戦略では、4000 文字を追加すると、タグ CV30 から CV34 までの値がデータベースで 255 文字に切り捨てられます。

フィックス: 修正されました。

### DAT-200

問題点: SDM コマンドラインツールでは SMRY パーティションの古いパーティションが削除されません。

フィックス: SDM コマンドラインで SDM の操作対象になるテーブル名を指定するための -tableName スイッチが追加されました。

### DAT-202

問題点: SDM の manage\_data.bat は archivePartition および dropPartition に対し更新されていません。

フィックス: manage\_data.bat はパーティションのアーカイブおよび削除を行うためにテーブル名を指定できるよう更新されました。

### DAT-204

問題点: 5.1.3 のパッチに含まれるデータベース移行は esec\_bcpout 用のストアドプロシージャを破損させます。

フィックス: Windows 認証を使用して、bcp で正しいコマンドライン用スイッチが使用されるよう esec\_bcpout スストアドプロシージャを更新しました。

### DAT-205

問題点: manage\_data.bat スクリプトにより、アーカイブしていないパーティションも削除されます。

フィックス: manage\_data.bat スクリプトでエラーを検出するように、SDM を変更して例外が発生するようにしました。

## マニュアル:

### DAT-201

問題点: Sentinel データベースマネージャに -tableName のコマンドラインスイッチが追加された点についての更新がマニュアルに反映されていません。

フィックス: 『Sentinel User's Guide』および『Sentinel インストールガイド』が更新されました。

### SEN-4447

問題点: 「513\_Sentinel\_Install.pdf」に記載されている手順では、イベントの挿入戦略を JDBC から OCI に変更できません。

フィックス: OCI のロード戦略のセットアップ方法を明確にし、トラブルシューティング用のヒントを加えるため、マニュアルを改善しました。

#### SEN-4461

問題点: Crystal のインストールガイドの DEP を Windows 用に構成する情報に誤りがありました。

フィックス: Crystal のインストールガイドを更新しました。

#### SEN-4463

問題点: 64 ビットの Windows 2003 および MSSQL 2005 がサポートされているかどうかが明確ではありません。

フィックス: マニュアルが更新されました。Sentinel データベースがデータベースのコンピュータにインストールされている唯一の Sentinel コンポーネントである場合は、64 ビットの SQL サーバはサポートされます。たとえば、Sentinel データベースがコンピュータ A にインストールされ、残りの Sentinel コンポーネントがすべてコンピュータ B にインストールされている場合は、コンピュータ A に 64 ビットの SQL サーバを実行する 64 ビットのコンピュータを使用できます。

#### SEN-4464

問題点: 『User's Reference Guide』の dbConfig.bat の使用方法が最新ではありません。

フィックス: マニュアルが更新されました。

## 既知の問題

### インストーラ

- <Alt>+<PrintScreen>キーを押してインストーラのスクリーンショットを取得しようとする、インストーラの画像が文字化けして表示されます。これは InstallShield のバグによるものです。これを回避するには、<PrintScreen>キーのみを使用します。

### Sentinel

- arp -a コマンドを実行しようとする、ワークフローは Start Eradication Process より先に進むことができません。回避策は次のとおりです。
- DAS コンポーネントを実行するマシンに esecadm ユーザとしてログインします。
- esecadm ユーザのホームディレクトリで「.bash\_profile」ファイルを開き、PATH 環境変数に「usr/bin」ディレクトリを含めます。
- 別の動作を実行するように、テンプレートの動作を変更します。
- インシデント、コレクタ、コレクタマネージャ、または iTRAC のビューオプションにフィルタを設定する場合、日付を保持する属性フィールドをフィルタの一部に含めると正しく動作しない場合があります。
- Sentinel コントロールセンタの [Admin] タブにある [アクティブなユーザセッション] に、一時的にコレクタビルダにログインしたユーザのセッションが表示されます。
- Analyst 役割が空で (製品インストール時には空)、自動応答ワークフローがインスタンス化されている場合、サーバは WORKFLOW\_SERVER を割り当てます。ただし、その後 Analyst 役割にユーザを追加すると、割り当てが再解釈されずに、新しいユーザはそのプロセスに関連付けられているワークアイテムを取得しません。回避策は次のとおりです。
- ワークフロープロセスを開始する前に、割り当てられているすべてのグループに必ずユーザが存在するようにします。これによって、この問題の発生を回避できます。
- 割り当てられたグループにユーザが存在しない状態で iTRAC プロセスをインスタンス化した場合は、次の手順を実行して、この問題を解決します。
- 問題の原因になっているグループにユーザを追加します。

- 対応するテンプレートを編集して保存します。この場合はテンプレートに変更を加える必要はありません。単に、その手動の動作をダブルクリックしてカスタマイザダイアログをポップアップ表示し、同じリソースを再び選択し、[OK]をクリックしてテンプレートを保存するだけでかまいません。
- これによって、ワークアイテムの割り当てが強制的に再解釈されます。これで、Analyst グループのユーザにこの動作のワークアイテムが表示されるようになります。
- ユーザ定義テンプレートを作成して保存した後に、同じテンプレートカスタマイザでは編集が実行できません。これを回避するには、新規作成したテンプレートを保存した後に、テンプレートで変更を行うには、テンプレートウィンドウを閉じてから再び開きます。

### ウィザード

- コレクタビルダで「Populate Network」機能を使用する場合、コピーされたポートの環境設定の UUID がリセットされません。これによって、同じソース ID を持っているコピーされたポートの環境設定からイベントが発生します。
- [WIZ-1684]コレクタビルダを使用してコレクタをデバッグすると、コレクタビルダが予期せずに終了することがあります。コレクタビルダの[Execute One Command (コマンドの単独実行)]デバッグボタンと[Resume Command Execution (コマンド実行の再開)]デバッグボタンを時間(2 秒以上の間隔)を空けてクリックすれば発生しないはずで。

## Novell テクニカルサポート

ウェブサイト:<http://www.novell.com>

- Novell テクニカルサポート: <http://www.novell.com/support/index.html>
- 各国の Novell テクニカルサポート:  
[http://support.novell.com/phone.html?sourceidint=suplnav4\\_phonesup](http://support.novell.com/phone.html?sourceidint=suplnav4_phonesup)
- セルフサポート:  
[http://support.novell.com/support\\_options.html?sourceidint=suplnav\\_supportprog](http://support.novell.com/support_options.html?sourceidint=suplnav_supportprog)
- 年中無休サポートは、1-800-858-4000 にご連絡ください。

---

### 免責条項

この情報は、米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社の内外から発生したものです。本文書の内容または本文書を使用した結果について、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。また、本文書の商品性、および特定目的への適合性について、いかなる黙示の保証も否認し、排除します。

本文書に記載されている会社名、製品名はそれぞれ各社の商品、商標または登録商標です。